様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 11 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：　2008～2009
課題番号：20820049
研究課題名（和文）　プラトンの中期対話篇における教育思想の展開に関する研究

研究課題名（英文）　Philosophical Context of Plato's Educational Thought in his Middle Dialogues

研究代表者
西尾　浩二（NISHIO KOJI）
大谷大学・文学部・助教
研究者番号：20510225

研究成果の概要（和文）：本研究は、プラトンの中期対話篇（特に『国家』）における教育思想がどのような哲学的背景のもとで展開されたのかについて、その一端を解明した。プラトンの心の理論（魂の三区分説）は、理性を真の自己、気概を社会的自己の形成を担うものとして構築されていること、またこの位相の違いがイデア論の前提となる知識と思わくという認識論上の差異につながり、彼の教育思想の哲学的背景を形成していることが本研究で明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study elucidates the philosophical context of Plato's educational thought in his middle dialogues (especially in the *Republic*). It makes clear that Plato's theory of mind (his theory of tripartite soul) presents reason as true self and spirit as the part in which social self is formed, and that this difference of aspects has theoretical connection with epistemological difference of knowledge and belief assumed by his theory of Forms, and gives the philosophical context of his educational thought.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	820,000	246,000	1,066,000
2009 年度	780,000	234,000	1,014,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：西洋古代哲学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：プラトン、教育思想、魂、三区分説、気概、イデア論

１．研究開始当初の背景

本研究の大きな動機は、教育思想について具体的な考察の場を西洋思想の源流のひとつであるギリシア哲学に求め、とりわけプラトンの中期対話篇から後期対話篇にわたる教育思想の展開を哲学的観点から問い直すことで、西洋古代の教育論を支えている哲学的背景の一端を明らかにすることである。この全体構想のうちで本研究が主として取り組むのは、プラトン中期対話篇の教育思想の

展開に関する部分である。
　より具体的な背景は、次の三つである。

(1)本研究は、プラトンの『国家』に関する私の博士論文を土台に発展させるものであり、ギリシア哲学研究における最近の研究動向、すなわち、プラトンの中期対話篇とりわけ『国家』に関する研究が国内外できわめて盛んであるという研究動向と軌を一にしており、それに寄与するものである。

(2)本研究は、これまで希薄であったプラトンの教育思想の哲学的分析を重点的に行なう。とくに中期対話篇で導入される哲学的理論のうちで、心に関する理論である「魂の三区分説」と「中期イデア論」に着眼してプラトンの教育思想の解明をめざす。

(3)本研究は、プラトンの教育思想の現代的意義にも注目する研究である。教育の具体的現状が袋小路に入り込んでいる今日、西洋教育思想の源流であるギリシアの教育思想に立ち返って教育の問題を問い直す必要がある。本研究は、そうした時代の要請にも応えるものである。

２．研究の目的
　本研究の目的は、西洋古代における代表的な教育論のひとつであるプラトンの教育論について、『国家』を含む中期対話篇におけるその展開を哲学的観点から問い直すことにより、彼の教育思想を支えている哲学的背景の一端を明らかにすることである。
　具体的な研究目的は、次の三点である。

(1)プラトンが中期対話篇で提示した新しい人間像を表す心の理論（「魂の三区分説」――魂（心）は欲望・気概・理性の三部分からなるとする説）がどのようなものであり、またそれが彼の教育論・教育思想にどのように反映されているのかをテキスト上で検証すること。『国家』での新しい人間像については、博士論文に集約された私の研究でも、前期対話篇のソクラテス流の知性的人間像や『国家』第一巻のトラシュマコス流の欲望的人間像との対比に着目しながら、同書第四巻など関連箇所の記述に即して解明を進めてきた。本研究では、それを土台として、人間の感情と社会性に関わる気概概念（テューモス）、近世哲学の理性概念と異なるプラトン流の理性概念（ロギスティコン）についてさらに分析・検討を行い、分析結果を教育論での記述に照らして検証し、それによって、彼の教育思想の背景にはどのような理論があるのかを明らかにすることをめざした。

(2)プラトンの中期対話篇におけるイデア論（中期イデア論）を解明すること。プラトンのイデア論は、中期イデア論と、それがプラトンによって自己批判され変容を被ったのちの後期イデア論に分けられるが、本研究で扱うのは中期イデア論である。プラトンが『国家』で披露する教育観によれば、教育とは「「善い」ということ（つまり善のイデア）へ魂（心）の目を向けさせること」であり、この究極目的を達成するために、あらゆる教育活動は人間の発達段階に応じて適切にプログラムされなければならない、というのがプラトンの教育論の骨子である。したがって、彼の教育思想を十全に理解し評価するためには、「魂の三区分説」そのものの考察と教育論の検証に加えて、中期イデア論にまで踏み込んで考察することが求められるのである。

(3) 上記(1)(2)の考察を踏まえて、プラトンの教育思想がどのような現代的意義をもつのかについて示唆すること。これまでの私の研究では、法による再教育やメディア教育の視点から、その現代的意義を検証してきた。本研究でも、引き続きそうした現代的意義にも留意し、たとえばプラトンの教育論が現代の教育のあり方にどのような示唆を与えるのかを探ることを企図した。

３．研究の方法
　文献学的に精密な研究を行うことを目指したため、具体的には以下のような研究方法を採用した。

(1)文献・資料の扱いについて。プラトンやアリストテレスなどのギリシア語原典と翻訳を揃え、まず本研究に関連すると思われる箇所を集中的に調査・分析した。そのさい、問題の所在や研究状況を知り、論点を明確化するために、研究論文集や注釈書などの二次文献を同時並行的に収集して調査・分析を行い、批判的考察を加えたうえでそれを再び原典の読みに還元する、という手法をとった。また必要に応じて、古代ギリシアのテキストのデータベースである TLG (Thesaurus Linguae Graecae)なども用い、語句検索の結果に基づいてギリシア語原典や注釈書等を確認した。

(2) 「魂の三区分説」についての研究方法。私のこれまでの研究を踏まえて、この説がはじめて導入される『国家』第四巻の議論とその関連箇所を集中的に分析した。手順として、まず「魂の三区分説」における気概の部分について、その役割や位置づけを人間の社会的性格に留意しつつ再検討した。そのさい、気

概の概念のとらえ方に変更を加える必要が生じた場合には、速やかに論点の修正を行った。次に理性についても、私のこれまでの研究の論点であった「高次の欲求としての理性」に焦点を絞り、気概との違いに留意しながら、「魂の三区分説」における理性の役割と位置づけを再確認した。そして、これらの作業を通じて確認された気概と理性の役割や位置づけを、プラトンの教育論などでの記述と照合し、その妥当性を検証した。

(3)「中期イデア論」についての研究方法。『国家』でイデアがはじめて導入される第五巻の議論と、『国家』第六巻から第七巻で展開される「三つの比喩（線分の比喩・洞窟の比喩・太陽の比喩）」の議論についての分析・検討に着手し、それと平行して、関連箇所と考えられる『饗宴』の「美の階梯」の議論を参照し、そこでの「美のイデア」の意義を『国家』での「善のイデア」の意義と比較検討する作業にも着手した。これらの作業により、私がこれまで行ってきたプラトンに関する研究に、別の角度から新たな光を当てることをめざした。ただし、研究の途中で中期イデア論についていくつかの疑問点が生じたため、当初の研究計画に記したとおりに研究手順を変更し、プラトンの前期対話篇に見られる「何であるか」の探求（一般的には「定義」の探求とされるもの）にまで遡って考察することとした。具体的には、前期対話篇のひとつである『エウテュプロン』の研究に着手し、テキストと先行研究の調査・分析を行い、翻訳と研究用注の作成を進めた。

４．研究成果

まず研究の主な成果を記し、次に、得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、および今後の展望について記す。

(1)研究の主な成果

①プラトン中期対話篇の教育思想を支える重要な理論的支柱として「魂の三区分説」――魂（心）は欲望・気概・理性の三部分からなるとする説――について考察し、「気概（テューモス）」または「気概的部分（テューモエイデス）」の概念が何を表しているのか、その理論的役割、および教育論との関連を解明した。より具体的には、気概が理性的側面（欲望に逆らい理性に従う態度）と非理性的側面（理性に逆らい欲望に従う態度）をあわせもつという中間的性格を特徴とすること、気概が「恥（アイドース）」の感情を中核とする概念であり、したがって美醜や正不正の価値評価を伴う自己イメージ（他者から美しいと思われるなど）を前提としていることを、先行研究とテキストの検討を通して明らかにした。これにより、気概の部分が、ときに批判されるように心理学的根拠のない空疎なものではなく、またたんに怒りの感情の座でもなく、むしろ他者関係を前提する「社会的自己」の形成を担う部分としてプラトンにより提示されていることを立証した。さらにこの気概理解を、魂論とは別の教育論の文脈においても検証し、その妥当性の確証を得た。

②理性または理知的部分（ロギスティコン）の概念について、それが「真の自己」を示すプラトン流の概念であることを指摘し、「社会的自己」の形成にかかわる気概とは対照的な理論上の役割を担っていることを明らかにした。そのさい、この「理性＝真の自己」という考えには、理性そのものをも含めた魂（心）の全体を反省的・俯瞰的立場から統制する「高次の欲求としての理性」という、プラトン独自の理性のとらえ方が含まれていることを示唆した。

③上記①②を踏まえて考察を進めた結果、気概と理性には、それぞれが志向する対象の違いとともに、「思わく」と「知識」という認識論上の差異が重要なファクターとしてあること、すなわち、美や正の「見え」や「思われ（思わく）」をめざす気概と、真に善いものを「知る」ことをめざす理性という対比が軸になっていることを、テキストと先行研究の検討により具体的に明確にした。そこから、魂論がその点を介して中期イデア論へ理論的に連絡している可能性を示唆した。

④人間の発達段階に応じて構築されたプラトンの教育構想（初等教育と高等教育）をはじめ、彼の教育論などでの多くの記述が、「４．研究成果(1)①～③」に示された哲学的背景に基づいて理解できることを、テキスト上で立証した。

⑤「４．研究成果(1)①～④」の一部を、2008 年度には国内報告で公表し、2009 年度には前年度の研究成果をも加えて学術雑誌に公表した（下記５．を参照）。

⑥「４．研究成果(1)①～④」を踏まえて、プラトン中期対話篇の教育思想を支えるもうひとつの重要な柱である「イデア論（中期イデア論）」についても研究に着手し考察を進めた。研究の途上で、イデア論の十分な理解には前期対話篇でのソクラテスの「何であるか」の問い（一般に「定義」の探求と解されているもの）の意義を解明する必要性が生じたため、前期対話篇のひとつ『エウテュプロン』の研究を行

い、一部について翻訳と研究用注を作成した。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト
①プラトンの心の理論である「魂の三区分説」に関する研究成果（上記(1)①～③と⑤）は、『国家』を中心とする中期対話篇でプラトンがそれまでと異なるどのような新しい人間像を打ち出し、それが彼の教育思想にどのように反映されているのかを理解するための基盤となるものであり、国内外の最新の研究を含む先行研究の批判的検討と原典テキストの精密な読みに基づいて得られたこの研究成果は、当該分野での今後の研究に大きく寄与するものである。とりわけ国内では気概とその理論的役割についての研究が十分になされていない状況にあり、本研究はその穴を埋めるものとして有意義である。

②本研究は、プラトン中期対話篇の教育思想を、背景となる哲学的理論に基づけることにひとつの力点を置いたが、この点は従来の研究では十分に掘り下げて論じられない傾向にあった。「４．研究成果(1)①～③」を踏まえて得られた「４．研究成果(1)④～⑥」は、こうした研究の間隙を埋めようとするものであり、プラトンの教育思想がもつ可能性の再考を促すものとして有意義である。

(3)今後の展望
①本研究では、プラトンの心の理論（魂の三区分説）について『国家』を主な分析対象とし、あわせて『パイドロス』での記述も参照しながら考察を進めたが、今後はさらに、同じく中期対話篇である『饗宴』で表明されている思想との比較を試みる。具体的には、『国家』での三区分（三つの欲求）のとらえ方と『饗宴』でのエロース一元論（単一な欲求）のとらえ方が、どのような理論的関係に置かれているのかについて解明を進め、それによって、プラトンの中期対話篇における教育思想の展開をさらに見通しのよいものにする。

②イデア論（中期イデア論）について、さらに研究を進める。その前提として、まず「４．研究成果(1)⑥」で記した前期対話篇『エウテュプロン』の研究・翻訳作成を進め、注と解説を付して公刊する予定である。またこれに関連する研究発表を 2010 年度 3 月末に古代哲学フォーラムにおいて行う。発表に基づく研究論文は 2011 年度に学術雑誌『古代哲学研究』に投稿予定である。これらの作業を踏まえて中期対話篇の関連箇所の分析を行い、中期イデア論の生成と内実や、教育論および魂論に関する研究成果との関連などについて解明する。

③さらなる先への展望として、中期対話篇に関する以上の研究を踏まえ、『法律』を代表とする後期対話篇の教育思想への展開を解明する。より具体的には、後期対話篇で後景に退いたかに見える「魂の三区分説」とイデア論についてプラトンの立場の変容（中期対話篇からの変容）を検証し、それに伴う教育構想の変化・発展を確かめる予定であり、本研究の延長線上に位置する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

西尾浩二、「〈気概〉の概念再考—プラトンの『国家』439e-441c—」、『哲學論集』（査読あり）56、2009年、19-32頁。

〔学会発表〕（計１件）

西尾浩二、「プラトン『国家』の魂論」、大谷大学哲学会（2009 年 2 月 26 日、大谷大学)。

６．研究組織
(1)研究代表者
西尾　浩二（NISHIO KOJI）
大谷大学・助教
研究者番号：20510225